

争いを止める

野瀬 隆平

中学生の男の子が教室で殴り合いの喧嘩をしている。教師はどのように止めに入るのか。二人の間に入り、両者それぞれの言い分を聞いた上で、握手させて仲直りをさせる。これが、一般的なやり方であろう。

しかし、こんな方法もある。先生は二人と個別に会って、お互いの主張を聞いた上で、このように語りかける。

「いつまでも、いがみ合って争いの状態を続けていたいのですか。相手を許さないことで、また新たに厄介ごとが起きますよ。それをずっと負うことになるのですが、いいのですか」

二人とも内心は、なんとか終わらせたいと思っているので、どちらも「ノー」と答えるという。

中学の校長を務めたこともあり、宿題や定期試験を止めるなど、独自の教育方針を貫いたことで知られる工藤勇一先生の言葉である。仲直りを働きかけるのではなく、解決の仕方を自分たちに考えさせると云うのだ。

ロシアとウクライナとの戦い。お互いに何人もの犠牲者を出す日々が続いている。にもかかわらず、どちらも一歩も引かずに勝利を勝ち取るまではやめないと言い張っている。

ウクライナは各国に、より強力な武器を提供するよう求めている。結果的にはリスクはどんどん大きくなり続ける。

お互いに、相手の言い分に対して聞く耳を持ち、何とか戦いを止める方策を見つけ出すことが、結局は国民を救うことになる。国のトップとしての決断は大変難しいであろうが、そうしなければ、不条理にも死んでゆく人たちが増え続けるばかりである。

中学生の喧嘩と国同士の争いとを同列に論じることは出来ないだろうが、あの先生の言葉に、解決のヒントが潜んでいるように思う。

フランスの歴史人口学者は、こんなことを云っている。

「ウクライナにとって酷い戦争であることは間違いないが、ロシア側もすでに多くの犠牲者を出しているので、一旦確保した領土からは絶対に出て行かないだろう。認め難いかもしれないが、この現実を受け入れることから始めなければならない」

参考 : フランスの歴史人口学者、エマニュエル・トッドの話し。